

エッセイ 河島 一 夫

(文化一般)
 (熊本文化堂河島書店代表取締役)

一昨年、出久根達郎先生脚本で行われた「庭に一本夏目の金ちゃん」に、弊店の初代の又次郎が登場した。丁髷姿で座って商いをしてる所に、夏目漱石が本を求めに来るところから劇は始まった。又次郎は、嘉永二年七月十三日に新町で生まれている。その後下通で刀の柄巻を生業にしていたようだ。神風連の乱が起きた時に、志士達に柄巻きをしたということを知っている。西南戦争の後に、今の場所を買っているのだが、当時、坪井川が上通の所まで蛇行していて、すぐ斜め前に入った路地が町内の洗濯場だった。それで、今の場所を選んだのかもしれない。

又次郎は、西洋嫌いで、和書を扱う仕事に就いた。それは極端で、電線の下を通る時には鉄屑を頭にかざして歩いたという逸話も残している。その店に、四月に赴任してきた漱石が通うようになるのだが、明治二

十九年八月二十九日に又次郎は中風で倒れたのである。五高にいた黒本植先生が金沢に転動されてから、又次郎に出した明治三十年二月の手紙に「此頃はひとと臥床被成候御病状はいかが」とある。漱石とは、四ヶ月の応対ではなかったかと思う。その後は、明治十年生ま

上通と漱石

れの二十歳頃の長男豊太郎が、漱石の相手をしたことになる。寝ていた又次郎の教えを受けながら商売をしていたことであろう。また、出久根先生は私どもの業界誌に「吾輩は猫である」の文中にある「静岡に生きていますがね、それが只生きてるぢや無いんです。頭にちゃん髷を頂いて生きてるんだから恐縮しまさあ」と

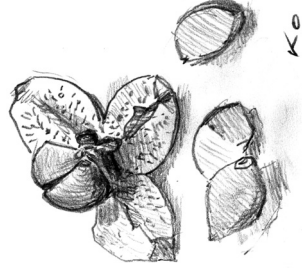
いう伯父さんとは又次郎のことではないかと書かれている。店に初めて訪れた時に、丁髷姿で頑固な又次郎にぎよっとしたことであろう。その又次郎は、明治三十六年一月十九日に亡くなる。享年五十四歳であった。

もう一つ、上通と漱石の話に、寺田寅彦がバイオリンを買う場面が「吾輩は猫である」の中にある。これを買った店が長崎書店と言われているが、これはおかしい。長崎書店は、明治二十二年に上通に新町から現在の場所に支店を出している。漱石も寅彦も長崎書店には足繁く通ったことは想像がつく。

この頃の長崎書店の主人の事が「くまもと商家物語」に書かれている。その一文を紹介する。

「次郎は商売上手ではほとんど天禀と言ってもよく、上京の途中大阪で仕入れて東京で売りさばき、東京で仕入れた書物は大阪、神戸、岡山と熊本への帰途にはほとんど売り尽くすという風で

カット・小村 啓治



あった。そして東京には年一、二回市が立つ時には必ず出かけて行き、また彼が行かなければ市がにぎわわないというほどで、買い口はきれいで、水際立ち、その買いぶりに同業者も感嘆の声を放つというありさまであった。(中略)大阪以西における最大の書店となった。長崎書店は本を商いとしていたのである。現在も書店一筋であるが、戦後には、学校に納める教材も数多く扱うような時期があり、その頃楽器も扱ったようである。

それでは、寅彦はどこでバイオリンを買ったのであ

ろうか。それは長崎書店の真向えにある大谷楽器店に違いない。大谷楽器店は、明治十三年に現在の場所で創業している(昭和十五年に上通で明治から営業している店を表彰しているが、その中に明治十三年創業とある)。明治三十年頃は、丁稚も多くいた楽器店になっていたであろう。バイオリンを買う場面を読んでみると「いえ、今度のかんかんは、ほんの通り一返のかんかんですから、別段御心配には及びません。灯影にすかして見ると例のバイオリンが、ほのかに秋の灯を反射して、くり込んだ胴の丸みに冷たい光を帯びて居ます」とある。夕日がバイオリンに当たっている場面だ。大谷楽器店は、正に夕日が入り込む場所にある。漱石は、夕方上通を通る度に、夕日に反射する店頭に吊られたバイオリンが目に焼き付いていたのであろう。

漱石忌手元に明治手繰り
 寄せ 一夫

昭和四十三年（一九六八年）一月六日、熊本市市民会館のこけら落とし公演に詰めかけた約四千人の観客は、宮中雅楽の演奏に魅了され、待ち望んでいた文化の殿堂落成の喜びに溢れていました。

「ハコモノ文化行政」と評された一時期に、多くの自治体が劇場・ホールを設置し、市民による独自の文化創造機能が果たせないまま、買い取り型公演と貸館事業を中心に行う現状は今も少なくありません。

そんな中、熊本市市民会館は、独創的な創作活動を行う機能が格段に高く、開館当初より他の自治体に先んじて独自の文化創造・発信を行ってきました。多方面にわたる文化活動者の皆様が積極的に交流、協働で独自の舞台を創造するだけでなく、文化活動者の資質向上や次世代を育成し、ひいては熊本市の文化振興に大きく貢献してきたと言えます。このことは、市民会館を応援してきてくださった

皆様それぞれのお力添えの賜だと改めて感じざるを得ません。

来年一月、熊本市市民会館は、開館五十周年を迎え、それを祝うコンサートが、三月二十四日に計画されています。東京藝術大学澤学長の指揮の下、ヴァイオリンの山崎貴子さん、熊本ユースシンフォニーオーケストラ、熊本少年少女合唱団、NHK熊本児童合唱団、熊

本七団体バレエ協議会ほか多彩な出演者による華やかな舞台が楽しみです。

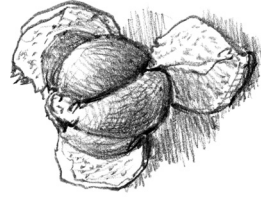
開館五十周年の節目を迎え、来年四月、会館は熊本市の直営から指定管理者制度に移行し、私たち熊本市社会教育振興事業団がその管理運営を受託することになりました。

指定管理者制度となって

もご利用に際しては、今までと何ら変わることはありません。ですが、市民会館の自主文化事業について、私たちは熊本県立劇場と連携して実施することとします。

県・市文化振興の中核となる双方の劇場ですが、芸術文化には自治体組織の違いによる境界などあるはずもなく、お客様にとっては市民会館・県立劇場のどち

らで何を上演されるのかが興味あるところです。交通アクセスに優れた熊本市民



カット・小村 啓治

市民会館開館50周年を迎えて

会館、高い機能の専用ホールを持つ熊本県立劇場、それぞれの劇場の特性を活かした文化事業を実現することで、皆様により満足いただけるものとし、地域の活力を創出する機会にしたいとの思いから双方の事業連携が実現したのです。

近年、文化芸術を「産業」として捉え、振興することが国際的にも大きな潮流となっており、諸外国では文化産業の経済規模を域内総生産、「文化GDP」として把握していることが少なくありません。我が国の文化庁も芸術や文化資産を産業振興に活かし、経済の活性化を促すために「文化GDP」の拡大に向けた取り組みを始めています。

今年九月、九州経済調査会は平成二十三年の経済活動別県内総生産の統計を基に、生み出される付加価値の総額を推計し、初めて都道府県別「文化GDP推計」を公表しました。

文学や音楽・舞台芸術・ビジュアルアーツ等「中核となる創造的芸術」をはじめ、広義的に関連するさま

ざまな文化資産・関連産業を集計した結果、全国の「文化GDP」は、三十九兆七千三百二十九億円で、全GDPの約八％です。熊本県の「文化GDP」は三千二百三十八億円、全国で三十位という結果でした。「中核となる創造的芸術」のGDPだけを比較すると、全国で十七位という位置づけですから、私たちの地域で創造された文化芸術や文化資産がうまく発信できず、消費者への流通を担う機能が低いということが示されているかと思えます。

「文化GDP」の拡大による経済波及効果への期待もさることながら、実施される舞台芸術をより広く発信し、熊本の魅力を知ってもらうことにもっと努力する必要があるのは言うまでもありません。

熊本市市民会館・熊本県立劇場での新たな文化事業の取り組みを、優れた芸術文化の創造のみならず、全国的な発信につなげていきたいとの思いを強く、開館五十一年目の市民会館運営に取り組みしていきます。